

松果体部から小脳上面にかけて出血を伴う巨大な腫瘍および水頭症を認めた。脳室体外ドレナージ術ののち、腫瘍摘出術施行した。肉眼的に全摘。当初の組織診断は pineoblastoma。化学療法として ICE 療法を行った。術後6ヶ月めに左腎腫瘍発症。摘出術を行うも、1ヶ月後には右腎および多発性肺転移をみとめ、脳腫瘍発症後8ヶ月めに死亡した。免疫組織診断にて vimentin, SMA, EMA が陽性を示したことから atypical teratoid/rhabdoid tumor (AT/RT) と診断した。

〔症例2〕11ヶ月、女児。発育遅延あり。嘔吐・けいれん発作にて発症。右側脳室を主座にする腫瘍および水頭症をみとめた。脳室体外ドレナージ術ののち、摘出手術を行った。視床下部に浸潤する部分を残し摘出。組織診断は choroid plexus carcinoma。化学療法として PE 療法、放射線治療を行うも腫瘍は増大し、8ヶ月後に死亡。症例1の経験をふまえ免疫組織診断を再検すると SMA, EMA が陽性を示し AT/RT と診断した。AT/RT は3歳以下に好発し、いかなる治療にも反応を示さないきわめて予後不良の腫瘍である。特徴的な組織学的所見に乏しいことから初期には診断に苦慮することが多い。まれな2例をまとめ、特徴等を報告する。

57 定位的放射線治療 (SRS) と ICE 療法が有効であった Mixed germ cell tumor の1例

白神 俊祐・高田 久・赤井 卓也
岡本 一也・笹川 泰生・飯田 隆昭
飯塚 秀明

金沢医科大学脳神経外科

松果体部に発生した mixed germ cell tumor に対し、Linac SRS および ICE 化学療法を行い寛解が得られた症例を経験したので報告する。患者は15歳男性。2週間前から頭痛、嘔吐があり、意識障害が出現し1999年12月10日緊急に紹介入院となった。入院時、うっ血乳頭、上方注視障害を認めた。CTで松果体部に石灰化を伴う腫瘍と脳室拡大があり緊急に脳室体外ドレナージを行った。MRIでは腫瘍は mixed intensity を示し Gd 造

影で不均一まだら状に増強された。血清 β -HCG は 103mIU/ml, α -FP が 93.8ng/ml と高値であった。内視鏡下に生検と第3脳室底開窓を行った。組織は、胚芽腫と胎児性癌(一部卵黄嚢腫瘍も疑われた)の所見があり、悪性成分を多く含む mixed germ cell tumor であった。腫瘍を含め全脳室に放射線治療(24Gy)を開始、5日後に SRS (25Gy) を追加、同時に ICE 療法(3クール)を併用した。SRS 後腫瘍は急速に縮小し、石灰化部分を残し画像上消失した。全脊髄照射(24Gy)を追加、その後 ICE 療法を5クール行った。初期治療から約2年後、複視が悪化し MRI で中脳背側に造影病変が出現した。腫瘍再発を疑ったが腫瘍マーカーは陰性で、MRI でも病変の増大はなく SRS による放射線障害と診断、ステロイド投与にて症状は改善傾向にある。術後約3年3ヶ月経過した現在、腫瘍マーカーは陰性で画像上も腫瘍の再発は認めず大学に進学している。

58 後頭蓋窩への転移性腫瘍に対する外科的治療の検討

毛利 正直・池田 清延・正印 克夫
岩戸 雅之

国立金沢病院

【目的】後頭蓋窩への転移性腫瘍に対する外科的治療について検討した。

【対象】過去3年間に当科で外科的治療を施行した後頭蓋窩への転移性腫瘍の5例を対象とした。男性1例、女性4例で、年齢は45歳から78歳であった。意識障害で発症したもの3例、めまいで発症したもの1例、痴呆で発症したもの1例であった。脳転移巣と原発巣がほぼ同時に見つかったものが2例あった。原発は肺癌2例、乳癌1例、子宮頸癌1例、悪性リンパ腫1例であった。部位は、小脳への単発転移2例、両側小脳半球への多発転移1例、テント上転移を伴うもの2例であった。

【結果】治療は外科的摘出後全脳照射2例、外科的摘出後 γ ナイフ2例(外ドレも併用1例)、外科的摘出のみ1例であった。症状の改善がみら